

自傷により要求行動を表現する重症心身障害児(者)への PECS 導入への取り組み

金子めぐみ[†]

IRYO Vol. 66 No. 3 (103-105) 2012

要 旨

重症心身障害児(者)(以下、重症児(者)とする)は言葉によるコミュニケーションが困難であるため、相手に自分の要求が伝わらず、強いフラストレーション状態となることがあり、それが自傷等の行動となる。われわれはそのような行動を問題行動と捉えているが、重症児(者)にとっては大切なコミュニケーションツールになっていることもある。そこで、要求を自傷で表現する患者に対して PECS (Picture Exchange Communication System: 絵カード交換式コミュニケーションシステム) の訓練方法を取り入れ、新たなコミュニケーションの獲得を試みた。その結果、激しい自傷が減り、穏やかに過ごせる日が増加した。

キーワード 重症心身障害児(者), 強度行動障害, 自傷, PECS

はじめに

われわれがコミュニケーションツールとして使用している『言葉』には、理解しやすく使いやすい等の利点がある。言葉によるコミュニケーションは、具体的な結果や社会的な結果を得るため、また、嫌なことや困難なことから逃避するために必要であり、それらが伝わらないと強いフラストレーション状態となることがある。われわれがストレスを感じた時、出現した情動を今までの経験をもとに表情や言葉等に表現する。しかし、脳に障害のある重症心身障害児(者)(以下、重症児(者))では、出現した情動を適切に表現することができず、自傷等の問題行動をコミュニケーションツールとして使用することがある。そのことを理解せずに関わることで、重症児

(者)の問題行動を誘発、増幅していることも少なくない。

われわれは、自傷で要求表現をする聴力障害のある患者に、自傷等の行動をおこさなくても欲しい物が手に入るということを理解してもらうため、自閉症の患者に用いられることが多い PECS (Picture Exchange Communication System: 絵カード交換式コミュニケーションシステム) の訓練方法を取り入れた。

症 例

40歳の男性患者で、病名は脳性麻痺(ワーデンブルグ症候群)、精神発達遅滞、てんかんである。視覚に問題はないが、聴力に障害があり、音への反応

国立病院機構兵庫青野原病院 看護課 †看護師

別刷請求先: 金子めぐみ 国立病院機構兵庫青野原病院 看護課 〒675-1350 兵庫県小野市南青野

(平成22年4月6日受付, 平成24年1月13日受理)

Approach on PECS Introduction into Severely Retarded Children who Requested Action due to Self-Inflicted Injury
Megumi Kaneko, NHO Hyogo Aonohara Hospital

Key Words: severely retarded children (person), strength behavioral disorder, expression of demand due to wound, the Picture Exchange Communication System

表1 訓練で必要としたプロンプトの程度

- a : 絵カードを自ら取ることも介助者に渡すこともできないため、絵カードを取って介助者に渡す所までの全過程にプロンプトを必要とした。
- b : 絵カードを自ら取ることができなかつたためプロンプトを必要としたが、持たせた絵カードを自ら介助者に渡すことができた。
- c : 絵カードを自ら取ることはできたが、介助者に渡すことができなかったため、絵カードを介助者に渡す所でプロンプトを必要とした。
- d : 絵カードを見せただけで、自ら絵カードを取り介助者に渡すことができた。

プロンプトとは、患者の欲しいものの絵カードを自発的にとれるように手助けすることをいう。

はみられない。遠城寺式発達機能検査において、手の運動は8-9カ月程度、対人関係は1歳-1歳2カ月程度、発語は5-6カ月程度であると判定された。言語理解は聴力障害があり測定不能であった。大島分類は5、強度行動障害スコアは34点で、欲しい物が手に入らない時などに激しく自傷行動をおこす患者である。

本患者に PECS を導入した理由

PECS(Picture Exchange Communication System)とは、絵カード交換式コミュニケーションシステムのこと、種々の絵カードの中から欲しいものの絵カードを自発的に選び、相手に絵カードを渡して欲しいものを伝える非言語的コミュニケーション手段・方法のことである。

1. 視覚からの情報を受け入れやすい。
2. PECS を始めるための、以下に示す条件が揃っている。
 - ①好きな物や欲しい物がある
 - ②何らかの方法で好きな物を明確に指し示す行動が観察されている
 - ③特別な微細運動スキルは必要ない
 - ④効果的に学習するために最低限達していなければならぬ発達年齢はない

訓練方法

研究期間は2008年9月19日-2009年6月30日までの約9カ月間で、PECSの訓練方法に従いフェイズIの訓練を実施した。

プロンプトとは、患者の欲しいものの絵カードを自発的にとれるように手助けすることをいう。

まず訓練開始前準備として、患者が好きな物を検

討し「お茶」と確定し、お茶の絵カードを用意した。患者にお茶をみせ、興味を示せば訓練をする準備が整ったと判断した。訓練の実際として、介助者は患者にお茶の絵カードを提示し、患者が自ら絵カードを取るのを待った。患者が絵カードを取らなければ、絵カードを取ることができるようプロンプトを行った。患者が絵カードを取れば、その後介助者に絵カードを手渡す行動を待った。絵カードを介助者に渡す行動がみられない時は、絵カードを介助者に手渡せることができるようにプロンプトを行った。介助者の手に絵カードを渡すことができればすぐにお茶と交換し、飲水させた。訓練で必要としたプロンプトの程度を表1のように設定し、患者の状況に応じてa~dのプロンプトを使用し、1カ月ごとに評価を行った。訓練時間は、10時と14時の水分補給時、もしくは欲しい物の所へ介助者を連れて行く行動がみられた時とした(表1)。

結 果

訓練開始後1カ月では自ら絵カードに手を伸ばすことはなかった。絵カードを持たせても放り投げてしまうことが多く、訓練の全過程のうち70%で手助けが必要であった。しかし、絵カードをみるようになってきた6カ月頃からは、絵カードを取るようになってきた。9カ月目になると、90%以上の割合で、絵カードをみせるだけで自ら手に取り、介助者に渡せるようになった(図1)。

訓練導入前後で興奮の変化について比較すると、「パニックになった日」に変化はみられなかった。しかし、「奇声・叫声があった日」と「激しい自傷があった日」の合計は訓練導入前21日間あったが導入後は3日間になった。「穏やかに過ごせた日」は

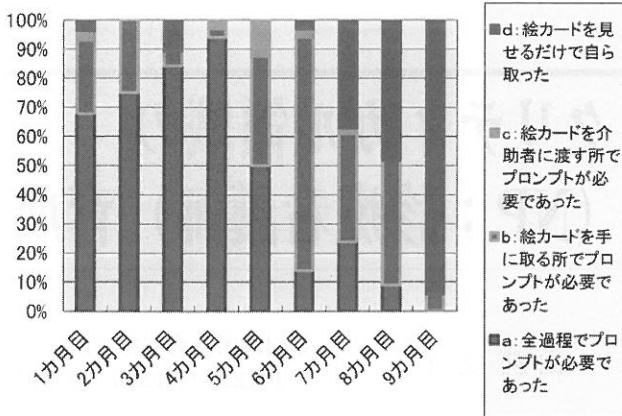


図1 プロンプトの程度

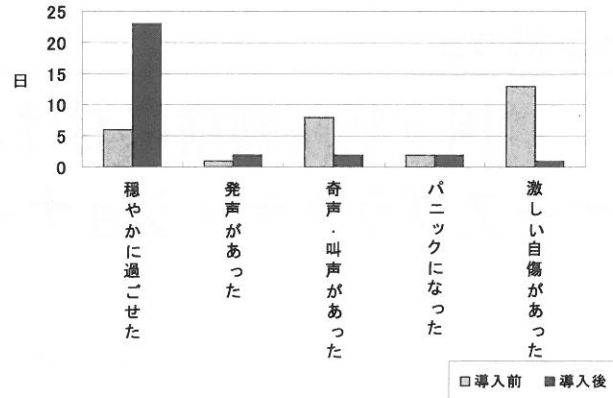


図2 興奮の変化

訓練導入前より約4倍になった(図2)。

れなかったのは、関わる側が絵カード以外の患者の要求に十分応えることができなかったためだと考える。

考 察

自閉症の患者に用いられることが多いPECSであるため、重症児(者)への適応は困難かと思われた。しかし、本患者にPECSを導入したことは、視覚からの情報認識が可能で、絵カードという新しいコミュニケーションツールを受け入れやすかったと考える。また、一般的に40歳という壮年期では、新たなコミュニケーションの獲得は困難だといわれているが、重症児(者)は正常な発達過程を経ないため、適切なプロンプトを含んだ訓練を受けることで新たなコミュニケーションの獲得の一步となり、行動の変化に繋がったと考える。興奮に変化が生じたのは、興奮しなくても自分の要求がわかってもらえるということを認識したためと考える。また、絵カードというコミュニケーションツールが関わる側にも認識しやすくなり、患者の要求に対してすぐに対応できるようになった。パニックに変化がみら

ま と め

行動障害を持つ患者の行動特性を理解し、問題行動に置き換わるコミュニケーションツールをみつけ、段階的なプロンプトを用いて毎日継続して訓練を続けることで、重症児(者)にも新たなコミュニケーションの獲得の可能性は広がる。

[文献]

- 1) Bondy A, Frost L 著, 園山繁樹, 竹内康二 訳. 自閉症児と絵カードでコミュニケーション—PECSとAAC. 大阪:二瓶社;2006.
- 2) 長畑正道, 小林重雄, 野口幸弘 編. 行動障害の理解と援助. 武蔵野:コレール社;2002.